

伊那方言における方言保持の男女差

中村 純子

1. 研究目的

女性は男性より早く標準語または威信形に言葉を変えること、また女性は男性よりそのような言葉に好意的態度を示すということは、世界の様々な場所で観察され、報告されている。例えば、イギリス(Trudgill, 1972: 182-183), アメリカ(Labov, 1966: 350), (Fischer, 1958: 55), オランダ(Brouwer, 1987: 222), イラク(Abu-Haidar, 1989: 479)等である。日本においても、Haig(1990: 14)が名古屋の学生を被験者として、やはり女性の言葉の方が男性の言葉より早く標準語化していることを確かめている。Angle and Hesse-Biber(1981: 449)はこの現象を“The Gender and Prestige Preference Theory”と名付けた。威信というのは、社会経済的に高い階級を意味し、威信形とはそのような階層で使われる言葉である。私、中村も、1991年に長野県の伊那地方で調査を行い、同様の現象を認めた。

しかし、同時に標準語化とは逆行する現象も認められた。方言が保持される現象である。

その際、若い男女は方言であっても権威のある形式を、そうでない方言形式に比べると長く保持していることが分かった。更に興味深いことに、女性が、方言であっても女性的な感じのする方言形式を残していることも分かった。まず、1991年の中村の調査結果から次のような二つの仮説を立て、新たな調査を行った。これを論証する形で次節以降述べていきたい。

- ① 女性は方言であっても女性的な要素のあるもの、親愛の情を表す終助詞「に」は保持する傾向にある。
- ② 権威のある方言形式である否定の助動詞「ん」は、権威のない推量の助動詞「ずら」より長く保持される。

2. 方法

2.1. 被験者および方法

仮説①、②を検討するため、被験者を四つのグループに分ける。各グループを、若い女性(YF)、若い男性(YM)、年配の女性(OF)、年配の男性(OM)とする。

どのグループも8人の被験者で成り立っている。若い男女のグループは、伊那市の高校に通う2年生である。彼らは伊那市またはその周辺で生まれ育っている。年配のグループは、年齢は66才から84才までで、職業は退職前はまちまちだが、現在は何らかの形で農業に携わっている。

それぞれのグループで2人ずつ組を作り、旅行について30分ずつ会話してもらって、それをテープに録音した。録音は、若い男女のグループは彼らの高校で、年配の男女のグループは彼らの旅行先の温泉で行った。録音中は会話者のみにし、できるだけ自然な会話をしてもらった。お互いの親しさや場の気安さから会話のスタイルはカジュアルである。

この録音のすぐ後で、被験者にインタビューを行い、彼らの方言に関する背景(注1)を調べた。録音テープを文字化した後、次節で述べる形式を選び、その使用数を調べ統計的処理を行った。

2.2. 対象とする方言形式

方言形式の選択にあたっては、録音・文字化した談話資料の中から次のような形式を取り上げた。

まず、使用の男女差がみられると予測される終助詞「に」、接続助詞「もんで」「で」および連母音の融合形「ee」。そして、権威のある方言形で否定の助動詞「ん」、威信のある標準語に近い方言形で推量の助動詞「ら」と、明らかに方言形と意識される「ずら」。また、使用の年齢差が予測される終助詞「え」。以上8形式である。これらは、いずれも伊那方言の中で頻繁に使用されている。

なお、伊那方言の位置およびこれらの形式の説明を、先行研究の記述を借りて簡単に紹介する。

まず、語法上の位置であるが、東条(1953: 46)は長野県の方言を東海東山方言に分類しており、その特徴的な方言形式として、「ず」、「ずら」、「ら」をあげている。また、馬瀬(1980: 180)は上伊那の方言語法について次のように述べている。

上伊那の方言語法は、1) 東日本方言のナヤシ方言(長野県、山梨県、静岡県方言)の特徴の諸条件を満足させながら、2) 一方、この地域が東西方言の接触地帯であることから、その北部から南部へ赴くに従い、東日本的特徴がようやく薄れ、代わって西日本方言的特徴が次第に色濃くなっていく、両方言のいわば漸移地帯的性格を持っている。

次に音韻上の位置であるが、馬瀬(1980: 55-56)は伊那地方全域は表日本式方言の中の東日本方言に属しているとしながらも、なお西日本方言音韻の特徴をも併せ持っているとしている。

以下、個々の方言形式について説明をしたい。

- 1), 2) 「ずら」, 「ら」は推量の助動詞。標準語の「だろう」にあたる。前述のように東条(1953: 871)は長野地方で使われている典型的な方言形式であるとしている。

ex. 明日は雨ずら/だら —— 明日は雨だらう

ex. 二人で帰って来るら —— 二人で帰って来るだらう

- 3) 「で」は接続助詞。原因・理由を表す。標準語の「から」, 「ので」にあたる。

ex. おごちそうがあるで行きてえ —— ごちそうがあるから行きたい

- 4) 「もんで」も接続助詞。「もん」が文を名詞化している。標準語の「ものだから」にあたる。

ex. あんまり飲まんもんで —— あんまり飲まないものだから

- 5) 「ん」は否定の助動詞。標準語の「ない」にあたる。伊那地方は、関西方言と関東方言の丁度方言境界線上にあるため、両方言が混在している。中でもこの否定の「ん」は典型的な関西方言である。

ex. ほんなこたあ分からんね —— そんなことは分からないね

- 6) 「に」は終助詞である。足立(1978: 162)によると、主張を示す働きがあり、標準語の「よ」にあたる。詳細は後述する。

ex. あそこはいいに —— あそこはいいよ

- 7) 「え」は終助詞。念を押し、感嘆する意味を表す。軽い敬意をこめた親愛の気持ちを表す(馬瀬, 1980: 237)。他の助詞と一緒に使用されることが多い。

ex. 暑いなえ —— 暑いなあ

- 8) 「ee」は連母音の融合である。連母音の融合は、上述の表日本式方言音韻の中の東日本的特徴の一つであり、上伊那方言では共通語の/a' i/, /a' e/にあたる場所は活発に現れるが、他の連母音では必ずしも顕著であるとは言えない(馬瀬, 1980: 55-56)。

ex. 食べてえ(tabetee) —— 食べたい(tabetai)

3. 結果と考察

表 1 若い女性の方言の使用状況

	ずら	ら	で	もんで	ん	え	に	ee
1F	0	*4/3	1	5	12	0	8	0
2F	0	1	0	3	0	0	2	0
3F	0	2	1	3	4	0	10	0
4F	0	2	0	10	8	0	3	0
5F	0	1	0	0	3	0	0	0
6F	0	0	0	0	3	0	2	0
7F	0	*3/2	0	2	*15/14	0	6	0
8F	0	1	0	3	15	0	1	0
計	0	*14/12	2	26	*60/59	0	32	0
平均	0	1.50	.25	3.25	7.38	0	4.00	0

*総使用数/総使用数－繰り返し表現。例えばそうずら，そうずらと繰り返し使った場合は1回とする。表2, 3, 4も同じ。

平均値は総使用数から繰り返し表現の数を引いたものの合計を被験者の数で割り算出。表2, 3, 4も同じ。

表 2 若い男性の方言の使用状況

	ずら	ら	で	もんで	ん	え	に	ee
9M	2/1	7	1	7	18/17	5	0	52
10M	6/5	14	4	7	14/13	2	0	35
11M	1	4	1	8	24	1	0	84
12M	2	0	10	1	26/19	8	0	55
13M	2	1	2	1	14	1	0	23/22
14M	0	2	4	5	10	0	0	28
15M	0	16	1	4	25	0	1	38/37
16M	0	25	8	4	31	0	1	44/43
計	13/11	69	31	37	162/153	17	2	359/356
平均	1.38	8.63	3.88	4.63	19.13	2.13	.25	44.50

表 3 年配の女性の方言の使用状況

	ずら	ら	で	もんで	ん	え	に	ee
201F	0	2	5	10	6	2	0	1
202F	5	6	10	18	20	0	4	1
203F	0	2	0	2	3	0	1	0
204F	2	2	1	22	13	8	5	2
205F	8	6	4	33	15	2	4	24
206F	1	4	6	39	15	15/13	6	8
207F	3	3	4	18	19/17	72/61	0	15
208F	4	14	13/12	27	19/18	32/30	0	14
計	23	39	43/42	169	110/107	131/116	20	65
平均	2.88	4.88	5.25	21.13	13.38	14.50	2.50	8.13

表 4 年配の男性の方言の使用状況

	ずら	ら	で	もんで	ん	え	に	ee
209M	0	4	5	8	5	31/30	2	12
210M	4	8	0	15	10	49/46	0	28
211M	7	7	7/6	19	19/18	6	34	17
212M	10	14	0	6	10	88/82	0	9
213M	0	1	10	15	9	48/41	0	22
214M	7	7	12	20	14	49	1	39/38
215M	2	1	4	13	10	26/24	0	14
216M	2	5	6	5	4	39/32	0	17
計	32	47	44/43	101	81/80	336/310	37	158/157
平均	4.00	5.88	5.38	12.63	10.00	38.75	4.63	19.63

表5は世代間、性別で比較した。若い女性と男性、年配の女性と男性、若い女性と年配の女性、若い男性と年配の男性の比較である。

表 5 方言の使用頻度

	ずら	ら	で	もんで	ん	え	に	ee
YF/YM	*.0179	*.0418	*.001	.1131	*.0037	*.0179	*.0032	*.001
OF/OM	.3192	.2643	.4364	.0571	.0951	*.0158	.1711	*.0119
YF/OF	*.0059	*.0059	*.0032	*.0032	*.0228	*.0059	.1867	*.0016
YM/OM	.0708	.4168	.2483	*.0043	*.0059	*.001	.2643	*.0032

YF=若い女性, YM=若い男性, OF=年配の女性, OM=年配の男性。

YF/YMとOF/OMの欄の下線は, 女性の使用頻度が男性のそれより高いことを示す。

YF/OFとYM/OMの欄の下線は, 若者の使用頻度が年配者のそれより高いことを示す。

*はP<.05のレベルで有意差があったことを示す。

統計はNon-Parametric Wilcoxon-Mann-Whitney Signed Rank Test(注2)を使用。

これらの結果からみると, 若い女性は若い男性よりも, 八つの内六つの方言形式において統計的に有意に低い頻度で使用している。全般に, 若い女性の方が若い男性より, 方言の使用率が低いということが分かる。ところが, 例外として「に」と「もんで」の二つの方言形式がある。

「もんで」の使用数に関しては, やはり若い男性の方が多く使っている(男性37回に対し女性26回)が, 他の方言形式と違い統計的有意差が認められなかった(P=.1131)。また, 「に」の使用数に関しては, 若い女性が若い男性をはるかに上回っている(女性32回に対し男性の2回)という結果が出た。さらに統計的な有意差(*P<.05)も認められた。

若い女性と年配の女性を比較しても, 若い女性の方が方言使用率が有意に低い。ところがここでも唯一の例外として「に」があり, その使用数は若い女性32回に対して年配の女性20回である。統計的有意差こそ認められなかった(P=.1867)が, 他の方言形式を若い女性がほとんど使わないことを考えると, 「に」は明らかに若い女性が保持し活発に使用していると言える。

それでは若い女性がなぜ「に」を保持しているのだろうか。具体的な例を用いてここで詳しく検討したい。以下の会話は被験者である高校生女子の実際の会話である。

(1) 名詞+だ+に

- a) 3F: やっぱりあったかい国に住みたいね, 広島方面...。
6F: あっちー, なんか南国ちゅう感じじゃん, なんか。
3F: そう言われればそうだけど, ねえ, いいじゃん。
6F: なんか椰子の木みたいのが生えてるんだに, その道あたりに。
3F: 長崎とかね。
- b) 1F: 辰野(地名)にもスキー場できればいいのにね。
7F: むーり。
1F: 無理?
7F: ん。
1F: いい所だに。
7F: 飯島(地名)もいい所だに。
1F: あ, そう。
7F: ん, 自然がいっぱい。

(2) 動詞+に

- 2F: 私, あそこへ行きたい。
8F: どこ?
2F: カナダのね, 端っこのほうに, 北アメリカのほうかな。(中略)
8F: でもさぶいでしょ, すごくそこ。
2F: え, え, 冬が長いんだと思うんだよ。
8F: でも寒いでしょ。
2F: でも夏とか緑はあるに, すごく緑はあって...。

(3) 形容詞+に

- 4F: 家の前の家が飼ってるんよ, 牛を。
5F: 牛を?
4F: うん, だもんでちょっと近くにあるんだよ。
5F: 田舎だー。
4F: いやー, 違うよー, そうだもんでね, 風向きが悪いとちょっと臭いんだよ。
5F: それはあるねー。

4F: 食べ物に臭いがしみちゃうんだよ。

5F: いいんだよ、自然の香りで。

4F: ちょっとつらいに。ハハハ(笑い声)

以上の会話から「に」に対応する標準語として考えられるものは二つある。一つは終助詞「よ」であり、もう一つは終助詞の複合形「わよ」である。しかし、女言葉の終助詞「わ」はこの高校生の会話には一度も登場しなかったことを考えると、ここは「よ」と考えるのが妥当だと思われる。また名詞化された「んだに」の場合は対応する標準語形は「んだよ」または「のよ」の二つが考えられる。この高校生の会話にはやはり女言葉の「のよ」の形式は使われていなかったことを考えると、その標準語形は「んだよ」だと思われる。

「に」と「よ」は、その基本的な機能 --話し手の主張を伝える-- においては同じだが、ニュアンスに違いがあるようである。普通体プラス「に」の方が普通体プラス「よ」よりも女性らしい印象を受ける。それではなぜ「に」が「よ」に比べ女性らしい感じがするのか考えてみたい。

まず、「よ」の機能についてMcGloin(1990: 28)は次のように述べている。

「よ」は話し手の主張を表現し、それが平常文の中で用いられると、聞き手には、その内容が話し手の聞き手への主張、忠告、警告と取れる。

「わ」と同様、上昇調にも、下降調にも発話される。ただし「よ」の話し手の主張の強さは、「ぞ」や「ぜ」に比べ弱い。もし両者の関係が親密ならば、目下の者から目上の者に使ってもいい。

さらにMcGloinは、「よ」は女性も使えるが、普通体プラス「よ」は男性の方が使う傾向にあると指摘する。つまり普通体プラス「よ」が男性的であるので、それと比較して普通体プラス「に」が女性的な印象を与え、女性に好まれているだけなのであろうか、それとも「に」そのものに女性的な印象を与える要素があるのだろうか、ここで更に検討してみたい。

「に」の働きについては馬瀬(1980: 240)は次のように指摘する。「に」は文末にあって軽い敬意と親愛の気持ちをこめて余情を含む確認を表す、男女とも使うが女性に多い。また福沢(1980: 388-389)は、「に」を強引な主張ではなく、哀訴であり愛嬌になっている、伊那谷の女の子たちは「に」をしきりに使用する、と述べている。『日本方言大辞典』(1989: Vol 2. 1779)においては、「に」は文末にあって

感情を添えたり、強調したりする意を表すと説明されている。これらの文献の「に」の分析は女性の会話の特徴 --女性が発話を強調し、自分の感情を相手に伝えようとする(Lakoff, 1975: 56-57)-- ということにつながりそうである。Lakoffは女性がイタリック体、つまり強調体で話すとしている。その意味するところは、自分の言っていることが果たして相手に分かって貰えるか自信がなく、確実に相手に分かって貰うため強調をする必要があるということである。また、McGloin(1983: 12)は、話し手が感情を強調することにより、話し手と聞き手の間に感情的に共通な土壌が生まれ、それを維持することになると言っている。そして更に、これが女性の会話に重要な役割を果たしていると言う。つまり女性は常に聞き手を意識し会話を進めているということで、それはBrown and Levinson(1978)の述べるpositive politeness(注3)に当たり、それが女性らしい印象を生み出していると主張する。馬瀬の言う敬意と親愛というの、話し手を常に意識する女性の談話には欠かせない要素であろう。つまり「に」は女性の女らしい談話に一役買っていることになる。

そして、「に」の女性的な印象を担うものの一つとして、常に上昇のイントネーションで使われていることがあげられるだろう。上昇のイントネーションは話し手の言っていることが不確かな印象を与え、それ故主張のニュアンスが薄れ、聞き手に決定権を与えるというような効果を持つ。女性の文末の上昇調の使用の心理に関し、Lakoff(1975: 17-18)は次のように述べている。

女の英語だけに使用が見られる特有の抑揚形式が存在する。それは、質問に対する断定的な解答の形式を持っていて、実際その通りに使われるのであるが、一種特別なためらいを含んでいるだけでなく、イエス・ノー疑問文に典型的な上昇調イントネーションで発音される。必要な情報を持っているのは話し手だけでありながら、話し手が相手に賛同を求めているかのような効果がある。(中略) おそらくこうした特徴は女言葉が男言葉に比べてはるかに丁寧な印象を与えるという一般的な事実の一部をなしているものであろう。丁寧さというのは、すでに述べたように、話し手が強い断定をしないで、決定をオープンにしておき、話し手自身の意志、見解、主張といったものを他人に押し付けないようにするという一面がある。(れいのるず/川瀬共訳, 1985: 29-31)

日本語における上昇のイントネーションの女性的印象については、Reynolds

(1985: 22-23)もKitagawa(1977: 287)もその論文で検証している。若い女性は「に」を上昇のイントネーションで使うことにより、巧みに主張の意味を和らげているのではないかということである。

以上のことから若い女性が「に」を保持しているのは、「に」が聞き手に女性らしい印象を与えるからと言える。「よ」と同様、必要な情報は話し手側が持っていることを示してはいるが、その醸し出す雰囲気は話し手の主張というよりはむしろ相手と自分が同じ会話、気持ちを分かち合っているということの確認で、女性らしい会話運びに貢献している。上昇のイントネーションから来る主張のニュアンスの弱さも、「に」の使用を保持させている理由だと言えるだろう。

以上により仮説①は支持されたと言える。

「ん」に関していうと、やはり若い女性の使用数は若い男性、年配の女性のそれと比較すると有意に低い(* $P < .05$)。しかし、この研究で調べた八つの方言形式の中では最も使用頻度が高い(59回)。「ん」は関西地方の方言で、従って「ずら」や「ら」などの伊那地方の方言形式と比べて権威のある形式と言えるからであろう。若い男性もやはり「ん」の使用数が153回と多く、威信形を好むと言える。他に若い男性が年配の男性と比較して多く使用する形式は、「ee」と「ら」がある。「ee」はいわゆる男っぽいしゃべり方で東京等でもよく使われる。「ら」とその変形の「だら」は標準語の「だろう」に音が非常に近い。つまり若い男性が保持している方言形式は、威信形か男性的な響きのするもの、または標準語に近い響きのする形式であり、それらは「ずら」等と比べ、方言のもつ田舎臭い感じがしない。この結果は若い男性の心理をよく表している。女性程ではないにしろ、男性も方言を使うことを格好がいいこととは思っていない。しかし一方で「方言により醸し出される仲間意識も大事にしたい」(Trudgill, 1972: 184)。そこでこれらの方言形式を使うことによって、矛盾する二つの心理のバランスを取っているのではないかと思われる。

以上の結果から仮説②は支持されたと思われる。

4. おわりに

年配の女性と年配の男性は、方言の使用数において統計的有意差は見られなかった。これはおそらく、年齢及び移動性の少なさに拠るのではないかと考えられる(注4)。年配の被験者は、日本の標準語教育の途上で育ったと言っていいし、年配の男女における移動性は限られている。彼らにとっては仲間のつながりが最も

大事で、それを維持するには方言の使用が効果的だからであろう。

若い被験者は、方言でありながらも権威ある形式、または男性的/女性的な感じのするもの、音声的に標準語形に近いものなどの要素のいずれか一つ、または二つ以上併せ持っている方言形式を比較的保持している。特に若い女性に見られた方言形式「に」の保持は、女性が一樣に標準語または威信形に言葉を変えていくという一般化(Angle & Hesse-Biber, 1981: 449)と、標準語が女性的、方言が男性的という見方(Trudgill, 1972: 183)に一つの疑問を呈した。

【注】

- (1) 出身地、年齢、今までに居住した場所とその年数、退職前の職業、方言に対する印象。
- (2) 計算方法は、まず二つのグループの全ての値(個々の被験者の方言使用数)を多い順番に一つの整列に並べる。次に多いものから点数化する。ここでは16のサンプルがあるので、1位を16点とし、2位を15点...16位は1点とする。その後、公式に当て嵌め計算する。この方法を用いた理由は、サンプルの値そのものを使わないことにより、統計結果がある特定のサンプルの特異性から影響を受けないということである。例えば本研究のOMとOFの「に」の使用を比較すると、OFのグループの方がそれぞれのメンバーがまんべんなく「に」を使っているにもかかわらず、OMの1人が34回と使用数が極端に多いためOMのグループの平均使用頻度がOFのそれより高くなる。しかしこの方法を使うことによりその特異性を排除することができる。詳しくは参考文献参照(畑村/奥野/津村共訳, 1972: 125-126)。
- (3) Brown & Levinsonは、positive politenessとは話し手が聞き手を自分の仲間として扱うことによって、聞き手のpositive face(他人に好かれ誉められたいという欲求)を満足させる方法であると定義する。なお、negative politenessとは、negative face(他人から迷惑を受けたくないという欲求)が尊重されることを保証することによって聞き手を安心させる方法である。
- (4) 女性の地理的移動性、社会的移動性、言葉の変化の関わりについての研究には次のようなものがある。Labov(1972: 244)はニューヨークの最も社会的に地位の低い階級の女性たちは、言語をどんな場面でも変えなかったこと、それに対して少しでも上の階層に上がる可能性をもった中流の下の階級の女性は自分達の言葉を場によって変化させたことを報告している。またNichols

(1983: 62-63)は、サウスキャロライナのある地方で年配の女性の言語が男性のそれより標準語化していないという報告をしている。それは、女性が就学や就職の機会が限られていたからだと言及する。また一方で、若い女性は、女性でも得ることが可能な職業、例えば教職等を得るのに有利なので標準語を早く取り入れるという事を言及している。Gal(1978: 14)は、ハンガリー語とドイツ語のバイリンガルの村で、若い女性が結婚によってより高い社会的地位を手に入れるためにドイツ語に言葉を替えると報告している。

【 参考文献 】

- 足立惣蔵 (1978) 『信州方言辞典』 松本: 遠兵パブリコ
- ジョージ・スネディカー著, 畑村又好/奥野忠一/津村善郎共訳 (1972) 『統計的方法』 東京: 岩波書店
- 東条操 (1953) 『日本方言学』 東京: 吉川弘文館
- 徳川宗賢監修 (1989) 『日本方言大辞典』 東京: 小学館
- 福沢武一 (1980) 『ずくなし 上巻 (上伊那の方言)』 長野県, 伊那: 伊那毎日新聞社
- 馬瀬良雄 (1980) 『長野県上伊那誌: 第5巻 民俗篇下』 長野県, 伊那: 上伊那誌刊行会
- ロビン・レイコフ著, かつえ・あきば・れいのるず/川瀬裕子共訳 (1985) 『言語と性/英語における女の地位』 東京: 有信堂
- Abu-Haidar, F. (1989). Are Iraqi women more prestige conscious than men? Sex differentiation in Baghdadi Arabic. *Language in Society* 18: 471-481
- Angle, J. & S. Hesse-Biber. (1981). Gender and prestige preference in language. *Sex Roles* 7 (4): 449-461.
- Brouwer, D. (1987). Language, attitudes and sex stereotypes. In D. Brouwer & D. Haan (ed.), *Women's language, socialization and self-image*. Dordrecht, Holland: Foris Publications.

- Brown, P. & S. Levinson. (1978). Universals in language: politeness phenomena. In E. Goody (ed.), Questions and politeness: strategies in social interaction. Cambridge: Cambridge University Press.
- Fischer, J.L. (1958). Social influences on the choice of a linguistic variant. *Word* 14: 47-56.
- Gal, S. (1978). Peasant men can't get wives: language change and sex roles in a bilingual community. *Language in Society* 7: 1-16.
- Haig, J.H. (1990). A phonological difference in male-female speech among teenagers in Nagoya. In S. Ide & N.H. McGloin (ed.), *Aspect of Japanese women's language*. Tokyo: Kuroshio Publishers.
- Kitagawa, C. (1977). A source of femininity in Japanese: in defense of Robin Lakoff's "Language and Woman's Place." *Papers in Linguistics* 10 (3-4): 275-298.
- Labov, W. (1966). *The social stratification of English in New York City*. Washington, D.C.: Center for Applied Linguistics.
- _____. (1972). *Sociolinguistic patterns*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Lakoff, R. (1975). *Language and women's place*. New York: Harper & Row, Publishers.
- McGloin, N. H. (1983). Feminine wa and no: why do women use them? *Journal of the Association of Teachers of Japanese* 20: 7-27.
- _____. (1990). Sex difference and sentence-final particles. In S. Ide & N.H. McGloin (ed.), *Aspect of Japanese women's language*. Tokyo: Kuroshio Publishers.

- Nichols, P.C. (1983). Linguistic options and choices for black women in the rural south. In B. Thorne, C. Kramarae & N. Henley (ed.), *Language, gender, and society*. Mass.: Newbury House Publishers, Inc.
- Reynolds, K.A. (1985). Female speakers of Japanese. *Feminist Issues* Fall 1985: 13-44
- Trudgill, P. (1972). Sex, covert prestige and linguistic change in the urban British English of Norwich. *Language in Society* 1: 179-95.

(なかむら じゅんこ・信州大学農学部非常勤講師)